



『 骨粗しょう症検診に血液検査が??? 』

骨は、成長期に活発に作られ、20歳代で骨量はピークを迎えます。そして40歳代くらいまではおよそ一定していますが、その後、年齢とともに減少していくそうです。

骨は成長期が終わっても、骨を壊す働きをする「破骨細胞」が骨を吸収（骨吸収）する一方で、骨を作る働きをする「骨芽細胞」が、破骨細胞によって吸収された部分に新しい骨を作ること（骨形成）を繰り返しています。この繰り返しを「リモデリング」と言い、1年間に20～30%の骨が新しい骨に入れ替わっているといわれています。

骨粗しょう症は、ホルモンのアンバランス、栄養のアンバランス、運動不足、病気や薬などの影響でこの「リモデリング」が崩れて、骨吸収が骨形成より大きくなり、骨量の減少が著しくなることによって起こります。また、骨の微細な構造の変化、小さな骨折などの蓄積、骨を作るコラーゲンなどの成分の劣化による骨質の低下も骨粗しょう症の原因となります。

この骨質を調べるために、血液や尿で検査する「骨代謝マーカー」測定があります。将来、骨粗しょう症検診に、「骨代謝マーカー」測定が加えられ、予防の一助となるかもしれません。



鹿児島県厚生連
中央検査室次長 日高 好博